

86年度は、私達のグループは、安藤(養護、産休のため9月より桜井にバトンタッチ)、石川(理科)、梶原(数学)、川合(体育)、田中(社会)、徳井(技術・数学)、長谷川(国語)、三橋(生物)、安田(養護)の9名であった。週2時間の授業を、時間割上は田中と徳井が担当していることになっていた。田中と徳井はほぼ全授業に参加したが、他の7名は、自分の授業とぶつかっている場合も多く、総合学習で授業を担当する場合は、時間割変更を必要とした。ティーム・ティーチングを標榜していたが、特に2学期の生徒発表に入ってから、田中・徳井以外のメンバーの出席は少なかった。これは物理的にやむをえないことなのだろうが、少なくとも、発表生徒の指導にあたったメンバーの出席は、時間割変更をしてもらう配慮をすべきだったと思われる。

「労多くして得るもの少なし」という空しさが払拭できないのだが、期待過剰に過ぎるのかも知れない。生徒たちが、話し合いの面白さ、大切さに気づき、物事を総合的に見ることの大切さを認識してくれば可

とすべきなのかもしれない。本章において引用した多くの生徒たちの意見・感想の中にも、その2つのことを証明しているものを散見することが出来る。また、「生命について」というテーマのもとに、やや強引すぎるくらいに色々な事象を、生命の尊厳、自然の大切さと結びつけたが、「生命の尊厳、自然の大切さ」という視座から色々な事象をとらえ、アプローチする方法の一端を身につけさせることは出来たのではないかと考えている。

また私達教師の側にも、教科・科目の立場をこえて相互学習することの大切さ、研究し続けることの大切さ、1つのテーマの下でのティーム・ティーチングすることの大切さを教えてくれた。「生命の尊厳」「自然の大切さ」という大きなテーマの下に、全ての教科や科目、あるいは生活指導や学校行事までもが、どのように結びつかなくてはならないか、そして、そのための条件づくりがいかに難しいか、やりがいのある仕事か、を教訓として学びたい。

### Ⅲ 総合学習「生命について」の授業実践の まとめと今後の課題

徳井輝雄

#### 1) はじめに

1983年から1984年にかけて中3を対象にした総合学習を展開する中で、私達は総合学習のねらいとして、人間にとって学ぶとはどういう意味なのかを学んで欲しい、人生における学習の位置づけを学んで欲しい、教師も学んでいるという事を知って欲しい等の思いを持っていた。それは、高3文系選択生を対象にした時にも変わらないものである。ようするに私達は、この総合学習を通じて、生徒の生活意識や学習意欲の面というならば、学習の意味を知って欲しい、物事を総合的にとらえて欲しい、そしてさらに生き方を考えるキッカケにして、人生を積極的に生きていって欲しいという願いを込めながら授業をして来た。さらに又、授業の内容面というならば、生命を貴び、尊重し、生命を軽視する考え方や行為に対して敏感に反応し正しい態度をとれるようになって欲しいという願いをもっていた。さらに又、授業の方法についていうならば、色々な方法を総合的に使い興味の持てる授業展開をしたいと考えていた。見学、実習、学外者の話を聞く、

VTRや映画をみる等々の試みである。そしてさらに学校全体の総合学習化の気運を盛り上げたいと考えていた。

さらに大テーマ「生命について」を選んだ狙いを述べるならば次のようなものである。

『現代社会では、自殺、殺人、戦争、公害等生命軽視のあらわれや、体外受精、男女産み分け、遺伝子工学の実用化など生物学・医療技術の発展にともなういくつかの問題の出現などで、生命やそれにかかわる事柄についてその見解が問われる場面が多くなってきている。生徒達が将来1市民としてそれらに対するなんらかの態度決定を迫られた時、自分の命は勿論のこと、他人の命、人間以外の生き物を含めて、命あるものを尊重する生命観をもって対処してほしい』

1986年4月からはじまった高校三年生文系選択者のうちの13名を対象にして行った「生命について」の授業実践を上述のような観点から総括し、今後に残された課題は何であるかを探ぐてみたい。

#### 2) テーマは妥当であったか

##### (1) 大テーマ「生命について」

この大テーマは1)で述べたような狙いを込めて、総合学習研究グループのメンバーの教師によって提起されたものである。いわば教師の主観的願望が込められていた。それでは生徒達はどうか受けたであろうか。

肯定的意見としては、『この授業は「いのち」をテーマとしてずっと続けて欲しいと思います。まわりにもいのちを脅かすものは沢山あり、それらは人間によってもたらされているのだから』というものがあつた。

やや否定的意見としては、『一年間やってきたけどこれといって分かったことはありませんでした。前半の先生の話も後半の私達の研究発表も、みんなわからないことばかりだったし、とても難しいの1言です。「生命」といわれても何と答えてよいのか……。ただ「生命」という事を通じて、社会の状況や物の見方など、これから人間として生活していく上でプラスになることが多かったことは確かです。物が豊富な今の世の中こそ、「生命」について真剣に取り組むべきではないのでしょうか……。』

教師にとって、この大テーマは色々な問題提起がしやすく、時事性に富みしかも奥深い内容を含んでいるように思われる。我々グループは1987年度もこの大テーマで総合学習の授業を展開することを決めている。

1987年4月既にこの授業ははじまっているが、新しい生徒達12名もこのテーマで良いと考えている。

## (2) 小テーマについて

大テーマを色々な角度から考えるために、いくつかの小テーマを設けて担当教師を決めた。そして教師が生徒にそのテーマに沿った問題提起をした。小テーマは数が多く、内容はむずかしいものも多くあつた。生徒にはそれを受け入れる予備知識が不足しており、また関心や興味のもてないものもあつたため予期した成果を十分上げることができなかった。テーマ数を絞り込み、時間をかけて突っ込みを深くしかつやさしくする必要があつた。テーマによっては時事性に富んでいるもの、一、二年で学んだことを発展させる内容のものなど良いものもあつた。文系の生徒という事もあり自然科学系よりも人文社会科学系のテーマが好まれた。とくにこの総合学習に集つた13名には、遅刻や早退が多く、一、二年の時には学校に来て授業に出ず保健室に逃げ込んでいる時間の方が多かった生徒も少なからず含まれていたせいもあり、悩み、自殺、といったテーマに関心が多く寄せられた。

小テーマ群設定は、生徒の希望と教師の希望の接点に位置させるが良い。1986年度は生徒の意見を聞く機会をもたなかったことがまずかった点として教師・生徒双方から指摘された。1987年度はその反省点にたつて後述のような小テーマを設けた。

## 3) 1学期の授業について

### (1) オリエンテーション

1985年12月に、田中によって「広告」が出され、選択希望者が募られた。1986年4月には二時間をかけて総合学習とは何を狙っているのか、大テーマ「生命について」を決めたいきさつなどを説明し、生徒の意見も聞いた。1学期の中間テストでは、再び教師側の考えが田中の文案で生徒に示されている。これらについては、1986年度の名古屋大学教育学部附属中・高等学校の研究紀要第31集に報告した。

### (2) 授業のようす

生徒にとってはむずかしく、教師がしゃべりすぎて講義調のものが大部分であり、教授方法に新味のあるものは少なかった。討論を深めようとしても、生徒側の予備知識不足と興味関心のズレなどで思うにまかせずどうしても教師側からの一方的押しつけ授業の感をまぬがれることはできなかった。教師にとっても、平均3人の教師が毎時間出席していたにもかかわらず、事前の相互討論が不十分で、生徒の前でパネルディスカッションを展開するようなことは少なく、一つのテーマ、例えば男女産み分けという事について、生物学と倫理学両方の側から意見を述べあうというような事ができず、教科の壁を越えた議論を沸かせることができず、不燃焼のまま終ったきらいがある。

### (3) 考查の仕方

中間テストは論文型式であつた。時間が50分と十分ではなかったせいか、生徒の印象では十分書き尽せなかったようである。反省点としてはその場で書かせるならば参考文献などの参照を許して100分は保証する必要がある。中間テストの内容とその結果については前章及び名古屋大学教育学部附属中・高等学校発行の教育方法改善経費研究報告書「生徒の学習意欲を高めるための様々な工夫」(1987年3月) P114以降を参照されたい。

なお期末テストは、学んだ事項の説明をさせる問題を出すと同時に二学期の自学自習のテーマ選びを兼ねた希望調査を行った。

### (4) 評定の仕方

中間・期末テストの結果及び日頃の発言内容を考慮に入れ徳井と田中が意見を出し合つて評価した。もし時間が許されるならば、口頭試問をとり入れたテストの結果をもって評定してもよい。このことは、日頃の討論が口頭試問に相当させてもよいということを示唆している。しかしこれをあまり意識すると評定のための討論ということになり生徒に過度の緊張感を与えてしまう欠点もあつた。

### (5) 生徒の授業態度

毎時間おしゃべりやいねむりがみられた。他の事柄（いわゆる内職）をしている者が男子生徒に多くみられた。中間テスト時にこのおしゃべりや内職のことを注意し抑えようとしたにもかかわらずやはり続いた。生徒は、先生のしゃべりすぎと言うが、こちらは生徒のムダなしゃべりすぎを指摘した。思わず聴き耳を立てるような授業が少なかったことを物語っている。

#### 4) 二学期の自学自習及び研究発表について

##### (1) 自学自習

前掲の表（P25～P26の総合学習「生命について」授業一覧を参照）に示した如く約1.5カ月間は各自のテーマに従って調査研究を行った。学校図書館を利用し毎時間平均して4人の教師が指導に参加した。熱心にとり組んだ生徒が4人、不熱心でいいかげんであるとみうけられる者が4人、全く参加できなかった生徒が1人であった。1学期にくらべて熱心になった者もいた。

次にこの時期の指導例を示す。生徒は一週に一度の割合で調査研究した事を報告書（所定の形式のものを用意した）にして提出した。我々教師は各自1～2人の生徒を受け持つことにしたが、常時図書館で指導はできないのでこの報告書をみて指導することにした。以下はその例である。

人間の営みと自然破壊というテーマで核エネルギーの利用にともなう問題点を調べだした生徒に対して行った第1回の助言内容

- まず放射能の人体への影響を調べて下さい。  
まだわからない事が多いが、ヒロシマ、ナガサキ、チェルノブイリ、アメリカのアリゾナ・ユタ州などでのデータはそろいつつあります。  
とくにガン、白血病、遺伝障害に注目して下さい。また、原理的に放射能はなぜ生物体に悪いのかをおさえておいて下さい。
- 核エネルギーを利用するとどうして放射能が必ず出るのか？放射能を出さない利用方法はないのか。
- 現在の原子力発電技術のもっている問題点
  - 1 廃棄物処理の方法
  - 2 突発事故対策
  - 3 軍事との関係
- 参考文献  
ジョンウェインは何ぞ死んだか。  
V.T.R 核戦争後の地球——地球凍結——  
広島・長崎の原爆災害  
原子力公害  
原発の恐怖  
反原発事典Ⅰ、Ⅱ

#### 原子炉被曝日記

##### 第2回目の助言内容

- 先週は良く調べました。これで生物体への悪影響がどんなものか、それが何ぞ起るのがわかりました。
- 今週は実際の被害例を調べると良いと思います。
  - 1 核爆弾の被害……ヒロシマ、ナガサキ
  - 2 核実験の被害……第5福竜丸の久保山さん  
ネバタ、ユタ、アリゾナの住民やハリウッドの映画人、  
ビキニ附近の住民
  - 3 原子力の発電  
所の事故による被害 ……チェルノブイリ、日本の各発電所に働く人達
  - 4 核廃棄物による被害 ……ソ連ウラル地方  
米国ワシントン州ハンフォードの核兵器工場、ニューヨーク州の核燃料再処理施設、ペンシルバニア州、ニュージャージー州。
  - 5 プルトニウムのおそろしさ

この生徒は調査した文献がむずかしく、分らないこともあり図書館で居眠りをしていたこともあったが、結局次のような報告書をまとめた。

##### <人間の営みと自然破壊について>

“人間の営み”の1つとして、核エネルギーの使用について調べました。核エネルギーは現在発電から兵器まであらゆる形で人類に深く関わっています。核エネルギーの使用は広島原爆のような、兵器としての利用が最初であった。それとは別に、今日では発電のエネルギー源などとして、“人間の営み”に欠くことの出来ないものとなっている。現在問題となっている核軍縮問題にしても同じように、核エネルギーはまさに、人類の運命を左右しかねない重要なカギの一つであり、その問題については私達の今後の生活の上で、決して避けて通る事の出来ないものであろう。核兵器の膨張はSDIを生んだ。このSDIこそ、人類の宇宙への進出の第一歩となるであろう。あるいは、それとは全く逆に、核兵器自体によって人類そのものが滅んでしまうのか、それはわからない。

いずれにせよ、今後人間と核エネルギーとは、共存してゆくことになりそうだが、その上で、すでに多くの問題が生じている。主権が個人個人の手に委ねられている今、それらに対し関心をもたないということは、まさに愚の骨頂であろう。

先日のチェルノブイリ原発事故は、改めて核エネルギーの恐ろしさを認識させた。その最大の脅威である放射能について簡単に書こう。

α線——ラジウム→ラドン→ヘリウムの変化過程に生じる

β線——高速の電子

γ線——電磁エネルギー

これらを放出するものは、原発で言えば、ストロンチウム90、セシウム137、ウランの燃えかすである。これらは非常に寿命が長く、それゆえ恐れられている。

では、これらがどのように生命を侵す(すなわち自然破壊)のであろうか。

その最大最悪の作用は、細胞分裂の停止である。(これらは生殖細胞と体細胞で影響が違ってくる。)

なぜ放射能が分裂を停止させるのか。①水分を電離、イオン化(間接)②直接組織を破壊(直接)若い細胞や、分裂中の細胞は感受性が高い。ガン細胞は分裂中であることが多く、それゆえ放射線治療が可能である。

そして、その具体的な影響は2つある。

身体的影響——早期(1週間以内)

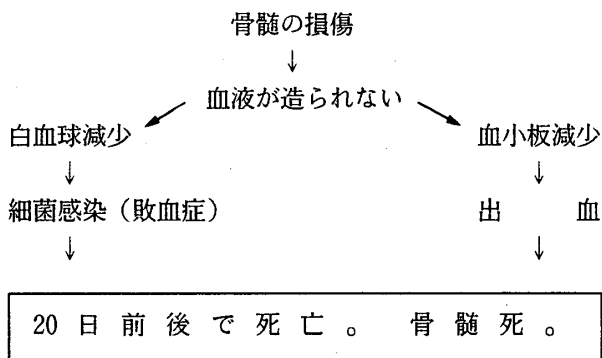
晩発(長い潜伏期)

遺伝的影響——遺伝子の突然変異

染色体そのものの異常(切断)

急性放射線症——被爆線量によって症状がかわってくる。

○1000レム以下(造血器官の損傷)



(広島原爆での最多死因)

○1000~10000レム(胃腸管の内部粘膜の損傷)

脱水

栄養補給の困難

細菌の侵入

8日前後で死亡。腸死。

○10000レム以上(中枢神経の損傷)

痙攣——数分~数時間で死(脳死)

爆発により生じる放射能は2種

○初期放射能——爆心(中性子爆弾はこれを利用)

○残留放射能——広範囲

初期放射能の及ぶ範囲は、爆風、火災の殺傷範囲内で事実上それ自体のみによる死者はない。普通の爆発と違うのはその残留放射能の存在である。

それは爆心の高度で変わってくる。

○高いとき(火球は地表に触れない)

残留放射能を含んだ放射性下降物は、成層圏まで上昇、降下に1年近くを要する。線量は食物循環によって内部被爆を引き起こす。たいへん広い地域まで広まってしまう。

○低いとき(地表にふれる)

いわゆる“死の灰”はこの場合生じるものである。これらはたいへん致死量を含んでいる。

(広島やチェルノブイリはこちらになる)

これらは、その時の天候(雨風)に大きく左右される。死の灰が雨で洗い流されたりすると、その雨の降った地域では放射能が集中することになる。前回のチェルノブイリでもこの現象が発生した。スウェーデンのイエーブレという町である。(年間最大許容量を越えた)

以上、放射能の人間に及ぼす影響について述べてきたが、本題通りの“自然破壊”もそれに伴って起こるのは当然である。放射能は、生態系を大きく乱す。

○放射能に対する感受性

哺乳動物>鳥、魚、蛙>爬虫類>細菌>アメーバ

放射線をうけた地域からやってきた渡り鳥ですら食べると内部被爆になってしまう。鳥の食べた魚のいる湖の水が汚染されているためである。

挙げていたらきりががないが、放射能は、生物に致命的悪影響を与え、それが何年も続くということだ。

テーマに関する自分の意見

そもそも原子爆弾を考えたのは誰か?核分裂を初めて成功させたのは、ドイツのオットー・ハーンとフリッツ・シュトラウスマンの二人である。その年は1938年、ドイツ開戦の2年前である。この事実を知って、連合軍は、あわてた。もしナチスが先に原子爆弾を完成させていたとしたら——。そして連合軍は爆弾を完成した。はじめは「悪魔のヒトラーに原爆をつかわせてはならぬ」ということだったのだ。ところが、ドイツはその前に降伏してしまった。残ったのはただひとつ“日本”だけだったのである。そこで社会主義国日本を作り出さないために広島に落としたというわけだ。(もちろんナゾは多いが)人類のうちわもめのために、

他の種の生物や、大自然はどんどん破壊されてゆく。今だって一刻一刻どこかで自然破壊と呼べるものが存在するだろう。皆さんは町を見てどう思いますか。アスファルトのよろいを着せられ、苦しそうに息をする街路樹を見て、美しいなんて思いますか。僕はそれを見るたびに何か言葉にあらわせない何かを感じます。人間の科学ばかり発達して、自然を侵害して、それで本当にいいんでしょうか。勝手に自然をいじくりまわして、本当に私達人間はなんともないんでしょうか。絶対にこのままではいけない、と僕は思います。

その反面、人間というものは苦痛を嫌います。歩くのが面倒だから車をつくり、通りやすいように通路を押しかためる。こんな事のくり返しなんです。

さらに悪いことに私たちは日ごろこんな事を全く意識せず、あたりまえにしています。この事はもっと恐ろしいことです。

こんな面倒な事は忘れてしまいたい。でもそれではいつか破滅がくる。今自殺者が多いのも結局世相の反映なんじゃないでしょうか。

もう一つの例を紹介する。ことばについて調べようとした女生徒に対して行った指導は次のようである。

まず女生徒から提出されたレポートを紹介する。

高3 総合学習スタディー・レポート 第(1)週 名前

1. 今週調べようとしたこと

田中先生がすすめて下さった

“色と形の深層心理”を読んでいる。

↑

(一見、私の調べることに無関係そうだが。)

2. 今週でどうことが分かったか。参考にした図書は何か。

3. これからどうことを調べなくてはならないか。

(1) 疑問点

(2) それはどうすれば解決できるか。

4. どういうふうに発表するか。

(1) 発表内容

(2) 発表方法

(9) 月 (16) 日記入

高3 総合学習スタディー・レポート 第(2)週 名前

1. 今週調べようとしたこと

“色と形の深層心理”を読んだ。

↑

テーマと関係ないようだが

勧めてくれた田中先生が悪い。

2. 今週でどうことが分かったか。参考にした図書は何か。

どうも自分の目の向く本と“ことば”というテーマとの関連性がなくなってしまう。

自分にとってことばというのは、あまりに当然なもので、だからこそ、一度考えようと思ったのだが、それについて“調べる”というのがよくわからない。

3. これからどうことを調べなくてはならないか。

(1) 疑問点

(2) それはどうすれば解決できるか。

4. どういうふうに発表するか。

(1) 発表内容

(2) 発表方法

(9) 月 (30) 日記入

これに対して行った助言

- 「生命」と関連して言葉という小テーマが何ぞ出て来たのだろうか。

生命のいとなみの中に共同性あるいは群を作って生きていくという事がある。

群や共同社会があれば、互いに連絡しあう必要がある。そこで情報交換の手段としてのことばが生じる。

この言葉は人間において一番発達し複雑になっている。人間社会が一番複雑だから、複雑な言葉も必要になる。よって言葉と社会の対応をみても面白いではないか。

- 色や形が言葉のかわりをする部分があるだろうか。たぶんあるだろう。言葉を失った人達について考えてもよいと君は思ったのではないか？

(この生徒は美術方面への進学希望をもっていたので)

- 本を読んで「調べる」という意味。

君は自分で一度考えようと思ったとある。田中先生のすすめてくれた本が悪いという。では一体なぜ本を読むのか？自分で考えていくことができれば本を読まなくてよい。本を読むのは、自分で考えることができない場合その本からヒントを得るためではないか。本を調べるのではなく、本で調べるのである。本がなくて良ければ自分で考えればよいのです。本にこだわっていて他人を恨むことはない。

結局この生徒はテーマを変えて脳の男女差についてただ1つの文献を調べただけで報告をした。

その他色々な助言を各生徒に行ったが、生徒は予想以上に自主的に調査研究の方向を決めていき、良いにつけ悪いにつけ、助言通りにはならない場合が多かった。図書館でのおしゃべりが多い者には注意をし、受験勉強(内職として)をしだす者に注意をし、1.5ヶ月が過ぎた。いずれにしても単なる文献調査、それも1件か2件で終わってしまい突込みが足らなかったものが多くあった。

## (2) 研究発表

前章に示した如く2学期には生徒による調査研究の結果の報告がなされた。司会は生徒が順番に行い発表と討論を混ぜたものになった。しかし討論は、生徒が順番に発言する形式で終わってしまうことが多く、十分深められなかった。発表そのものは熱心に行われたが、訴えたいことがうまく言葉にならなかったり、焦点がボケてしまったりしていることがしばしばあった。

1学期の反省をふまえて、教師の発言は抑え、なる

べく生徒に発言させるようにしたが、討論を深めることは困難であった。それらの原因がどこにあったかは後述する6)B(2)の生徒の発言にみることができる。次に研究発表時に発表生徒から配布された資料の例を示す。

### <あそび>

1. ここで言う「あそび」とは……

狭い意味の「あそび」や俗に使う「あそび」を言う。例えば、子供の砂遊びや、ゲームセンターのゲーム、ファミコンのゲームを言うのではなく、労働に対する余暇時間の活動、レクリエーション、レジャー活動という意味でとらえることにする。

2. 「あそび」とは何か……

今までは、生活のために、生産、労働に第1位の高い地位を与えてきたが、最近では豊かさを背景に遊びの大切さが認識されるようになってきた。そこで、人間にとって「遊び」(以下プレイとする)とは何かが大きくとりあげられるように成ってきた。

プレイについて書かれた二つの優れた本がある。ホイジンガーの「ホモ・ルーデンス」とカイヨワの「遊びと人間」である。

ホイジンガーは主として社会機能としてのプレイ、文化を創造する力としてのプレイに関心を向け、カイヨワはホイジンガーの説をふまえて包括的にプレイを把握して、プレイの理論をうちたてて、それをもとにして社会学の方へと進んでいった。

### <ホイジンガー「ホモ・ルーデンス」>

ホイジンガーは彼以前のプレイに関する説はみなプレイがプレイ以外の目的の為にありとしている点を批判して、プレイの本質はプレイのもつ楽しさであり、プレイの目的はそのものの中にあるとする。そしてプレイの形式的特性として次の項目を挙げている。

- ①プレイは自由な時間に行われる自由な活動である。
- ②プレイは日常生活から分離された利害関係を離れたものである。
- ③プレイは定められた空間時間の限界内でおこなわれる。

そしてホイジンガーは人間にとって非日常的世界を生みだすプレイの世界は日常的まじめさと同様に必要なものであるとの考えをもっている。

### <カイヨワ「遊びと人間」>

カイヨワはホイジンガーよりもプレイを広く包括的にとらえ、理論的にまとめている。まずプレイの定義として六つの項目をあげている。

- ①自由な活動②未確定な活動③分離した活動④非生産的な活動⑤ルールのある活動⑥虚構的活動

そしてプレイの基本的カテゴリーを次の四つに分類

している。

- ①アゴーン あそびの原動力になる競争意識
- ②アレア 偶然、運の遊び (ギャンブル)
- ③ミミクリ 模倣、模倣、仮装の遊び (演劇等)
- ④イリンクス めまい、眩暈を追求する遊び

#### 遊びに関する名大附属高校生の意識

##### ——アンケート調査結果——

1. あなたには自由に使うことの出来る時間 (食事や入浴、睡眠時間や勉強時間は除く) が1日平均何時間ありますか。A, B, C, それぞれの場合に答えて下さい。

A 平日 (学校にいる時間は除く)

2.7時間 内訳 1年3時間, 2年3時間, 3年2.2時間

B 日、祝日

7.3時間 内訳 1年8.1時間, 2年8.6時間, 3年5.1時間

C 夏休みなど長期休暇中

7.6時間 内訳 1年8.8時間, 2年8.5時間, 3年5.5時間

2. 1で答えた自由な時間をあなたは何ですごしますか。3つまで答えなさい。

	A	B	C
BEST 1 テレビをみる	77人	73人	65人
2 音楽を聞く	63	53	50
3 読書 (マンガも)	60	40	44

休日になるとふだん出来ない趣味や旅行をなどをする人も多い。ぼけーとしていたり、寝ていたりする人も結構いる。ちなみにA (平日) では29人

3. 余暇にあなたは何を期待しますか。次に挙げたうち3つまで○を付けて下さい。

(上位5位)

- ① 自分の時間を自由に使うことの喜び
- ② あわただしい日常生活からの逃避
- ③ 単調な生活のリズムをやぶるようなフレッシュな体験
- ④ 普段みききできないような珍しい体験
- ⑤ 1人になる機会

(下位5位)

- ① 世の中のしくみを把握できるよう視野を広げる機会 0%
- ② 世の中の為に尽くす機会 0%
- ③ 家族だんらん
- ④ 自分の能力を十分発揮する機会
- ⑤ 楽しみながら物質的報酬を得る機会

4. 現在余暇活動をするにあたり、あなたにとって次の12の目的はそれぞれのくらい大切ですか。最も

大切な場合に5点、大切でない場合は1点とし5段階で当てはまるところに○をつけて下さい。

	大切又は まあまあ大切	普通	あまり大切でない 又は大切でない
身体を休める	82.2%	14.6%	3.2%
性的な満足をうる	20.6	60.4	18.9
身体を鍛える	41.2	42.0	18.9
気分転換をする	86.4	12.0	1.6
生活上の実益を得る	38.0	48.5	13.5
知識や情報を得る	62.7	31.7	5.5
家族とのつながりを深める	44.7	42.6	12.7
人とのつきあいを円滑にする	61.7	32.6	6.4
まわりの人から認められる	26.5	59.2	14.3
孤独を味わう	31.6	35.0	33.4
そのこと自体を楽しむ	39.4	39.0	21.7
創造し未知のものにふれ人間性を高める	40.7	38.3	20.9

5. あなたにとって遊びは (1つだけ○)

勉強第一でそんな物は必要としない

1.7% (3年生65%で第一位)

勉強を一生懸命やるための息抜きとして過ごす

43.7%

勉強より何より優先すべきもの

53.8% (1年生75%で第一位)

6. あなたにとっての遊びの価値は (1つだけ○)

全く罪悪なのでありなくすべきである

1.6%

精神的にも肉体的にも健康で生きていく為には

不可欠なものだ 41.4% (3年生53.8%で第1位)

今改めて見直されているものなので関心がある

4.0%

何よりもなくてはならないもの、又これがなくては

生きていけないものだ 52.9% (1年生70.0で第一位)

#### <21世紀の一生の生活時間予測>

生活必要時間 29万時間

労働時間 5万時間

余暇時間 35万時間

寿命を80才とすると1日24時間×80時間=70万時間

労働時間と余暇時間の対比

ここではまず、ますます延びる人間の平均寿命に反比例して労働時間の短縮がすすめられ、その結果余暇時間が一方的に増大しつつあることに注目したい。

現代は単なる余暇時間という発想の時代ではなく、各自の一生の持ち時間のうちのほんの少しの時間しか働かないというような労働時間と余暇時間に関する従

来とは全く逆の発想がなされなければならない時代に来ている。

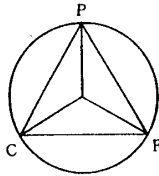
### ＜日本の食糧問題＞

人間一人のカロリー摂取量

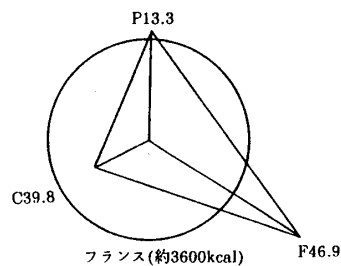
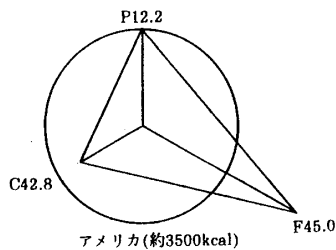
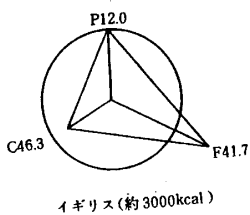
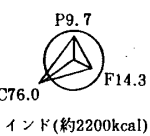
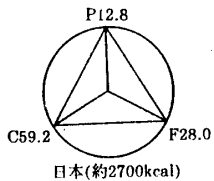
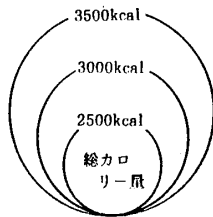
- P—蛋白質
- F—脂肪
- C—炭水化物

参考書 { 人類と食糧、その未来  
食糧21世紀の地球データにみる日本の食糧、  
初心者のための食糧、  
地理現勢 }

・PFCカロリー比

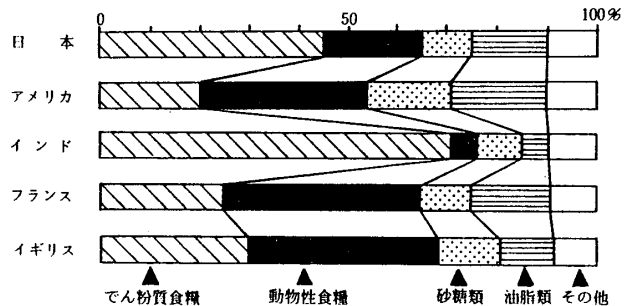


理想型 P-12~13%  
F-20~30%  
C-57~68%

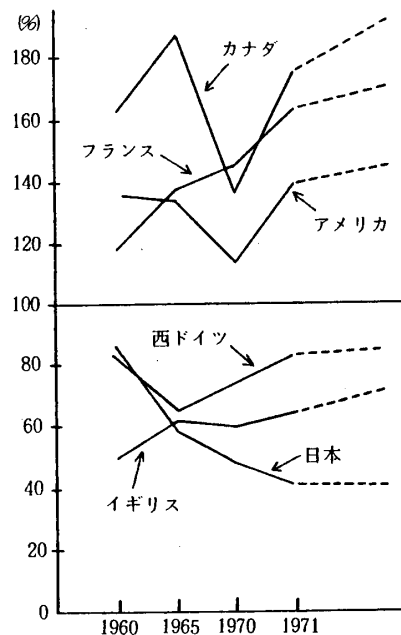


インドでは貧富の差が激しく金持ちは一般の日本人とは比べものにならないほど金持ちで、貧しい人は飢えと毎日をともに過ごしているという。アメリカには全部で60000~70000万匹の犬、猫がいるが、その犬、猫のほうがよっぽどおおくのカロリーを摂取している。

### カロリー量の内分け



### 穀物自給率



自給率が低いということはそれだけ輸入に頼っているということです。現在の日本の人口は約1億2千万人で、これは世界総人口の2.6%を占めます。この2.6%で、世界の農産物の貿易量の10%を買い占めています。インドでも自給率が90%以上なのに、日本のような大国が50%以下になったことは、過去に2つの国しか例がありません。日本の主食である米は第2次世界大戦までは自給が達成されていましたが、アメリカ占領軍がかかわってきってから、大きく変化してきました。



## 鉄則1

日本人1人1日当たりの供給熱量が増加し、栄養バランスが崩れてきたのは主にアメリカを中心とする食糧の海外依存体制による。

〔解説〕戦後から日本の食生活は変化してきた。アメリカは戦後の食糧危機につけこんで、小麦を大量に輸入させた。昭和40年代にはいって、米の生産が過剰になっても小麦の輸入は増加し続け、自給率は10%を切った。

小麦の輸入の原因として「国民体位向上の栄養論」があげられる。これは、欧米人と日本人の体格の違いを、それぞれ主食であるパンと米飯の違いによるとしたものである。

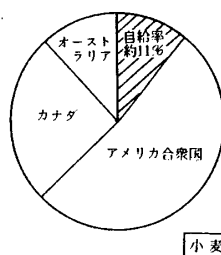
主食の海外依存体制ができあがるとこんどは大豆、飼料用穀物の輸入が増加した。その原因として、「所得が高い国ほど動物性蛋白質の摂取量が高く、澱粉質食糧の摂取量が低い」という説が信じられたことがあげられる。このことから、今まで魚を中心として摂取されていた動物性蛋白質を畜産物から摂取するようになったため、飼料用穀物の輸入を増加させたのである。また、澱粉質食糧である米、いも類が敬遠され始めたのもこの説が信じられるようになってからであると言えるだろう。しかし、この説はまったく偽りだと言わねばならない。なぜなら、モンゴル民族や北欧人は、日本人よりはるかに低所得であるにもかかわらず、熱量の多くを畜産物から摂取しているからである。

このように海外からの圧力、影響によって、小麦、大豆、飼料用穀物についての自給体制が崩壊した。

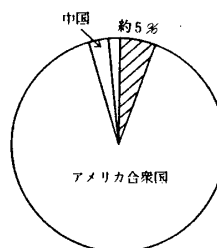
コシヒカリ、ササニシキなどに代表される日本米はほぼ自給が完成している。しかしアメリカの全米精米業者協会(RMA)が日本の米市場の開放を求めてきました。日本の米に手をつけることは日米間の深刻な政治問題に発展しかねないとみたアメリカ政府は、この提訴を却下しました。日本の米は国際価格の約10倍もします。もしアメリカからの安い米が輸入されるようになれば、消費者は喜んでアメリカ産の米を買い、日本の農民は大打撃を受けるだろう。そうなれば、もうからない米を作る農民は減り、自給率の低下は避けられないであろう。しかし、日本が米の市場を開かないときは、アメリカは日本製の車やその他の工業製品の輸入や他の農産物の輸出を制限すると言って脅せばいいという強みがあるので、結局はアメリカの思惑に近いものになるのではないだろうか。

## 日本の農産物の海外依存度

・小麦、大豆、とうもろこし、砂糖の4つの農産物を調べただけでも、日本人の命を支えている食糧が海外からの輸入にかかっていることがわかる。もしこの輸入がとまってしまったとしたら、国内はパニックになるだろう。



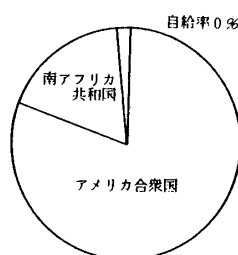
小麦



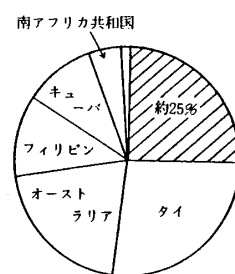
大豆

・大豆は一見、日本産に見える。例えば、豆腐、納豆、みそも、実際のそのほとんどが、アメリカからの輸入によって作られる。

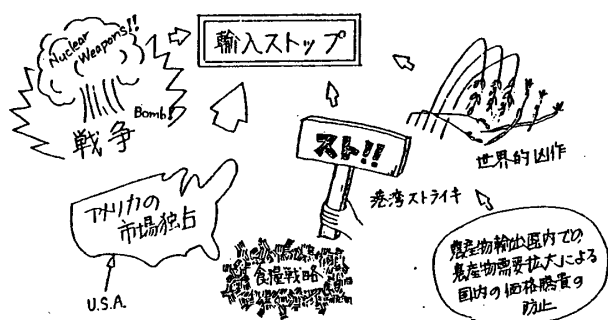
- ・畜産に必要な飼料食糧であるとうもろこしは、100%輸入でまかなっていることがわかる。そのうちの8割はアメリカ合衆国からの輸入である。
- ・砂糖は、アメリカ合衆国も輸入国側なので、日本の輸入相手国に入っていない。全体の75%を輸入している。

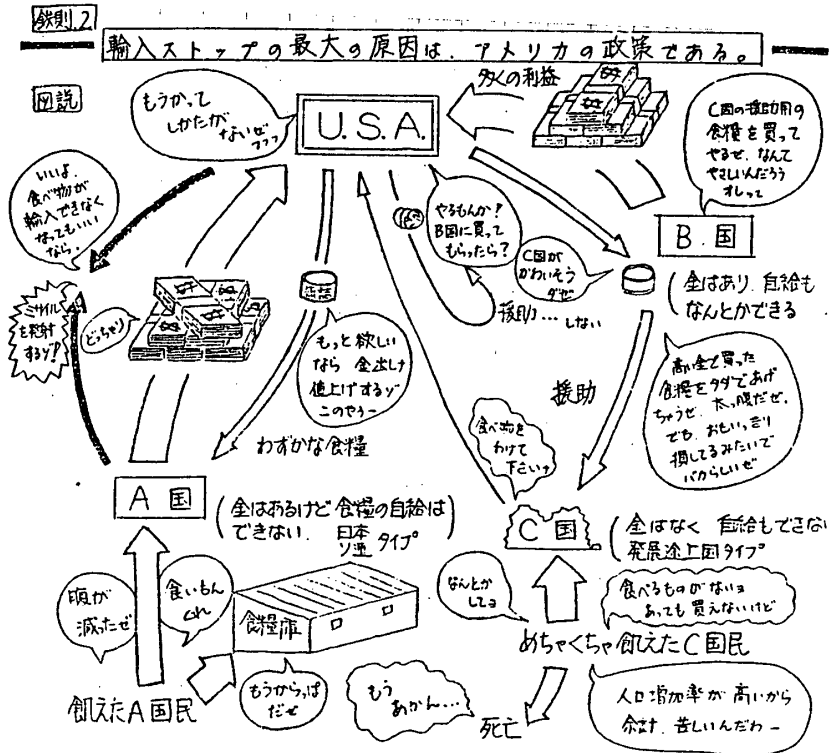


とうもろこし



砂糖





今、輸入がストップすれば、1500kcalまで低下すると言われています。これは生きていくだけで、精一杯の食生活です。

もしストップが一年間と分かっていたら、今ある在庫を食べつくしてしまえばいい。在庫の量は下のようになっている。

- ・米——15カ月分
- ・小麦——2カ月分
- ・油脂類——1カ月分
- ・砂糖——1カ月分
- ・鶏——2億羽など
- ・大豆——3カ月分
- ・乳製品——11日分
- ・飼料——半月分
- ・豚——600万頭

米は1人1日2合5勺(358g)を供給でき、後々のことを考えなければ、持ちこたえることができそう  
だ。しかし、これは、全国民が買い占め、売り惜しみを  
せず、平等に分けあった場合である。大正の米騒  
動、昭和の石油ショックの時のトイレットペーパー騒  
ぎのように、大パニックになることは、目に見えて  
いる。

在庫が無くなってしまった後は、現在のインドにもまさる飢餓が来る。なにしろ、インドの自給率は90%を越えていて、インド人が働く気を出せば、日本人なみの食生活になっても、70%は自給できるほどだからだ。

## 解決策

日本の食生活が安定するためには、農業を安定させ

なければならない、最大の農業離れの原因は、もうからないことにあると思う。働けども、サービス業に匹敵するほど多額の収入はない。これは、政府がどうにかしなければ解決できないだろう。

次に大切なのは土地利用である。企業が買収した農地、高額な値のついた土地、腹黒い政治家の私有地、増え過ぎたゴルフ場、レジャー施設の建設予定地、気候条件の良い土地に建てられ、公害をまき散らしている工場のある土地を農地にすれば良い。そこで米を要として、冬は小麦、四季に合わせて、年中たえない野菜、果物を作ればいい。大豆など田んぼの隅のあまった土地で作れば、みそ、納豆分くらいは、簡単にできる。

他では、世界一のレベルを誇る日本の造船と漁業技術を生かした水産業を見直す。自然災害に強く、カロリーが豊富な甘しょや、ワラクズ、米糠や家庭で大量に出される生ゴミを豚、鶏のエサにして、その排泄物を肥料にして、土づくりをする。

国内でダメなら、輸入先の多角化を考える。土地資源の豊富な国に、資金・技術・資材を投資して農業開発をして、その農産物を安く輸入する。etc. (ps. こんなことばかり考えていたら、自分が農民になった気がした。)

と、ここまで調べてきましたが、皆さんも日本の食生活の危機をひしひしと感じてもらえたでしょうか？これは日本国民の生死にかかわるのです。みなさんはこのことについて、どういう意見をもっているのでしょうか？

### (3) 二学期の考査及び評定方法

考査は一回行った。各発表に対する自分の意見を書くものであった。

評定は、自分の発表内容と他人の発表時での発言の様子をみて担当者二人が合議で行った。(前章参照)

### 5) 三学期について

高校三年生の三学期は大学入試と重なって授業時間の確保がむずかしい。予定では一学期や二学期にしのこした事を補いかつ一年間のまとめとしての研究報告集を出すことにしていた。実際は、二学期に発表できなかった一人の生徒の発表と、ワープロ練習及び反省会を兼ねた茶話会であった。

ワープロ練習は自分の研究報告を印刷させることが目的で、生徒は興味深く行うだろうと予想していたが、13名に4台の機械しかなくしかも50分間の授業時間内ではあまりにも短時間すぎて熱心さも発揮できない様子であった。大学入試が終って暇になった生徒にやらせようと計画したが、興味が今一つ湧かないようで登校して来た生徒は三人位であった。結局報告集は二学期の発表に使ったものを教師が活字化して印刷した。

この報告集は、当初、三年間の高校生活の卒論的意味あいを持たせてもっと充実したものにしたいと考えたが、時間的制約、大学入試、生徒の意気込みの低さ等が原因で二学期の研究発表原稿そのままの論文をこれに当てた物が大部分であった。

反省会を兼ねた茶話会は紅茶とケーキで行われた。ここでの発言は前述の教育方法改善経費研究報告集に載せておいた。感動して泣き出す女生徒もあり、三年間のしめくくりの会ともなった。

### 6) 今後の課題——'87年度へむけて——

#### (1) 授業及び研究発表の中で提起された「生命について」にかかわる諸課題

一学期の教師主導型の授業及び二学期の生徒の調査研究結果の発表を主体とした討論型の授業の中で話題になったいくつかの事柄について述べ、今後の授業教材の参考にしたい。

#### A 一学期の授業の中で提起されたもの

##### (イ) 神話・創世紀の世界から次の5つのポイントを1つ1つ深くとりあげていくとよい。

- ① 宇宙・生命の始源についての人間の解釈について
- ② 創造主、超越者としての神という考え方について
- ③ 時間・系譜としての神話について
- ④ 神話の類似性と独自性にみる日本と世界の古代における関係

##### ⑤ 神と人間との交わり——誕生儀礼——

##### (ロ) ダウン症対策——医学の進歩がもたらしたものの——を次の観点から討論すると良い。

- ① 生物学の立場(遺伝子プールの劣化の問題等)
- ② 倫理の立場(生れ出す生命をどう扱うか)
- ③ 社会学の立場(福祉充実の限度はあるのかないのか、障害者を社会としてどう扱う事が最も良いか。

##### (ハ) 性周期をめぐって次のような議論の発展が期待される。

- ① 家畜と生殖制御(人工受精を含む)
- ② 人間の自己家畜化現象(家畜学の応用としての人間での人工受精の問題)
- ③ 食糧事情と発情期の関係

##### (ニ) 1986年度1学期の中間テストに出された小論文テーマは今後の討論課題としていずれも良いものである。\*

※ 名古屋大学教育学部附属中・高等学校教育方法改善経費研究報告書「学習意欲を高めるための様々な工夫」(1987年3月)P117参照

##### (ホ) 生徒の自伝を書かせ、自己分析をさせてみる。これを通じて、自己を歴史的にながめたり、死の自覚と処理について考えるキッカケにする。

##### (ヘ) 自然淘汰的生物進化論についてこれを見直してみる。ダーウィンの進化論以外の進化論について調べたり、人間の自然界への介入により、現代生物界は、自然淘汰ではなく人間淘汰になっていないかなどの観点からの議論もおもしろい。

##### (ト) 人間の営みと自然との望ましい関係を追求する。たとえば公害問題、核エネルギーの利用の問題。

##### (チ) 宗教の役割について次の観点からみる。

- ① 死と宗教
- ② 人間の謙虚さと宗教
- ③ 政治が宗教を利用するとき

##### (リ) 老人問題を次の観点から深める。

- ① 社会制度との関係から
- ② 家族のあり方との関係から
- ③ 高齢化社会と医学の役割

##### (ヌ) 精神的苦悩——悩み——について。

悩みは青年期にはつきものである。高校生のこれへの関心は高い。次の観点から探るのもよい。

- ① 悩みの面からみた自伝をかいてみる。
- ② 時代背景を探る。
- ③ 学校の成績や進路についての悩みの背景には、実は社会制度とのむすびつきはないか探ってみる。
- ④ 恋愛での悩みの本質は何か。

##### (ル) 死生観を仏教、キリスト教、その他の立場から

ら調べる。

(ヲ) 殺人罪と死刑に関連して次のような発展が考えらる。

- ① 親子心中に対する日本と外国の考え方の違い。
- ② 殺人は罪であり死刑は殺人ではないのか。
- ③ 殺人と戦闘行為。
- ④ 正義の為の殺人は成立するか。

(ワ) 自殺と悩みと精神病の関係について調べる。

(カ) 労働が生き生きとした生命活動となるためには何がどうならなくてはならぬかを次の観点からみてる。

- ① 労働現場の様子（親などからの聞きとりも良い）
- ② 労働のよろこびとは
- ③ 遊びと仕事の関係

(ヨ) 食糧問題に関連しては、食糧を増やす努力を遺伝子工学の立場も含めて調べることで及び食糧の分配を合理的にするにはどうしたらよいかを考えてみる。

(タ) 他者の発見と言葉の関係についての議論を次の観点で行う。

- ① 言葉の大切さはどういう時によくわかるか。
- ② よく聞く、はっきりと伝える、よく考える、これらのことには言葉がある、逆にこれらのことをうまくやろうとする時言葉が発達する、この相互関係を把む。
- ③ 言葉が実体（内実）を伴わない場面が多くなってきた（誇大広告、マンガ、政治公約等）ことに対する認識と生徒自身の生活での言葉の軽重について。

(レ) 現代社会でのハレとケに関して

- ① 現代社会は何ぞハレとケがはっきりしないのか。
- ② ハレとケが大切にされた時代背景は何か。
- ③ ハレとケの効用と弊害。

B 二学期での調査研究の結果発表をめぐる討論で提起されたもの。

(イ) 老人の社会的役割は何か。

(ロ) 人間の発達と悩みの関係（悩みと進歩、死と悩み）

(ハ) 若人の悩み（勉強を押しつけられる悩み、大人や先生はなぜ勉強を押しつけるのか、勉強は何のためにするものか。）について語り合う。

(ニ) 上の（ハ）と関連して、教育とは何のためにあるのか、真の教育とは、高校は何のためにあるのか、について語り合う。

(ホ) 死ぬ勇気と生きる勇気

(ヘ) 死刑を言い渡した裁判長は殺人者ではないのか。

(ト) 人間は自然破壊や公害なしに生きていけるか。

(チ) 哲学的身体とは何か、哲学にとって身体とはどう映っているのか、魂と身体との関連についての言説の歴史の変遷について。

(リ) いきいきとした生活を送るための余暇活動とはどんなものか。

(ヌ) 失語症について調べることでより次のことを知る。

- ① 脳の機能回復とはどんなことか。
- ② 脳のしくみ。
- ③ 頭が良くなる。物事の判断ができるようになるとはどういうことか。
- ④ 学習と脳の関係

(ル) 脳の男女差と社会の男女差別の関係、さらに男女の役割分担の是非についての話し合い。

(2) 総合学習という学習形態に対する生徒の反応と評価

まず生徒の1年をふり返っての感想をみてる。

◎ 不安だらけで、1年間あーっという間にすぎてしまいました。今までの授業にない新しいタイプの学習と思い、この授業をとったのですが、そこはやはり1年目。結局私達は先生達のひいた線路の上を歩いただけでした。パターン化されてしまった授業内容もなんら変えることなく「しかたない」の1言でかたづけられた気もします。後半は3年生という事で受験勉強に追われ、なんとなく授業もうわの空のようでした。しかたないといえばそれまでだけど、総合の授業こそ、本当の授業じゃないかな!?たしかに受験勉強もとっても大切だとも思いますよ。でも長い人生、勉強だけじゃないんじゃないかなー。今の世の中、学歴社会と言われてしまっ、ちょっぴり残念だ。いい大学へ入った人がいい人間だっ、かぎらないし、いい大学って誰がきめるのかしら…とよく思う私ですが……。

あー話がそれちゃったけど、でも総合の授業をうけなかったらこんなこと絶対に思わなかったと思うな。もう私たちはおわってしまったけど、来年は自分たちでテーマ決めて、1から自分たちの手で作る授業をやってほしいですね。

最後に私たちをふくめ、総合の授業を受けた13名のみんな。長い間、ごころーさんでした。私たちは総合の1期生なのでR。

◎ 私達の頭では考え着かないことが起きたりしているが（ドクちゃん、チェルノブイリ等）、それについて良く分かった。また、自分だけでは気がつかない問題や、知らない事を少しでも知ることが出来て良かった。難しいテーマがあつてよく分からなかったりいまいち理解できなかったところがあるが、（この授業が）「難しく良くない」ということは無い

と思う。自分について言えば、ある物事について簡単な事は考えるが、難しいことを考えることを、頭が拒否してしまう。仮に考えたとしても、ちょっとしか考えなかったり奥深く考えないで極く簡単に考えたりしがちであるから、「生命について」難しい事を考えるのは必要な事ではないかと思う。

高3にこの授業を持ってくるのは「悪いときに—」と言ってしまえばそうだろうけど、もしかしたらこの時期に必要なことかもしれない。また高1、高2にこの授業を持ってきても、まじめにやるかどうか分からない。ここの学校はいきいきしているけど、他の学校ではただ受験の為の勉強しかしないという傾向が、この日本の高3生にでてきているのでは無いと思う。それは、激しい生存競争でもあるようだから、冷たい物が生まれやすい。その中で、「いのち」と言う暖かい物が必要なのではないかと思う。

あと野外学習があれば面白いと思う。普通ではやれない授業をやって欲しいと思う。

自分の考えだけでは偏りがちだけど、先生達の意見や友達の意見が、他の方面の事を考えさしてくれたり、誤った考えを改めることができるので、討論の必要性が感じられた。また、討論によって生命の事を考えられるから良いと思った。

先生が補助する形で授業を進めるのは良いと思った。一つ一つ生徒の間違った考えなど直す形で、または、先生も分からなくて迷う形で生徒と一緒に考えていくのはとても良いことだと思う。先生達も「はじめてのことだから—」とおっしゃっていたけど、それはそれで良かったと思う。

- ◎ 普段考えていないことを、他の人達が、問題提起してくれた。

もう少し、積極的に話し合えたら良かった。いままで関心を持たなかった事にも、関心を持つようになった。

このような、生命についての学習は、一人では、とてい出来ない事であった。

なかなか発言できなかった。

- ◎ いままで興味を持たなかったこと、たとえば、ベトナム戦争の枯れ葉剤によるといわれるベトナム君、脳死、などに興味を持つようになった。自分から発言できなかった、考えている事がうまく表現できなかった。

VTRをもっとみたかった。

- ◎ 自分は知らなかったことを知った。どうでもいいことと思っていたことがそうで無いことだと知った。自分の考えの狭さを知った。一学期の話は、役に立った。発表では、同世代の人達の考えがきけてよかった。

ベトナム君の話に関心を持ち、テレビや新聞を見るようになった。新聞では生命に関する事に、目を通すようになった。

- ◎ 知らなかった事がわかった。調べたことが、うまく皆に伝わらなかった。
- ◎ 発表形式がパターン化した。司会者がまとめや、しゃべっている人の注意などをするとよい。
- ◎ 考え出すまでに時間がかかり、興味がなかなか湧かなかった。
- ◎ おもしろいものはなかった。自殺、殺人だけは興味があった。テーマがすでに決まっていた。授業がパターン化した。
- ◎ ほんとうは、テーマを生徒たちで作り、授業計画も立てるべきだ。
- ◎ 医学関係の事には興味があった。医学にたいする、社会の考えがわかった。その他については興味はなかった。もっと、みじかなことから発表したかった。
- ◎ 時間不足で、分かりやすい発表ができなかった。今後このようなことを考えていきたいと思っている。
- ◎ テーマが難しい。皆でやったことが将来役に立つことがあれば、この授業が良かったことになる。レポートを書かなくてはならないのはしんどかった。
- ◎ 今まで無かった形式の授業なので、とまどった。
- ◎ 討論形式の授業はなかなかよかった。
- ◎ 生命について考えたことは良かった。発表は時間不足で思う事の半分しかできなかった。
- ◎ 最初はなかなか意見の発表が出来なかったが、だんだんと出来るようになってきた。皆上手になってきた。
- ◎ テーマが大きすぎた。テーマを絞った方が良い。
- ◎ 2年生だったらもっと一生懸命やれたのに。ちゃんとやった人とやらない人の差が激しかった。
- ◎ テーマは大きい方が良い。このテーマはやめられない方がよい。
- ◎ 印は生徒一人の発言分である。これをみると分るように、1学期には時事的な内容をもっていた授業に対して興味や関心がうすいように私達は感じられていたが、生徒の内面では関心が湧いてきたようだ。また発言がうまくいかないのは、思っていることがうまく表現できなかったからでその意欲はあったが表面には出て来なかったことになる。さらに私達がすばらしいと感じたのは、女性徒の一人が、「ほんとにはテーマを生徒達で作り、授業計画も生徒が立てるべきだ」と発言したことである。授業は先生だけで作るものでなく、本来は生徒も参加して作っていくべきものであることに気が付いたのである。これがこの総合学習の狙いの一つでもあっただけに貴重な発言であった。
- ◎ これらの生徒の反応から次の事がいえよう。

- ① 話し合いを主体とした授業形態をとったことは次ような長所をもっている。ムダな内容の空疎なおしゃべりはしていても、一つのテーマについてお互いに意見をたたかわせて討論するということを殆んどしていない生徒達に対して、自分の意見を発表する機会や他人の意見をよく聴きそれに対して自分の見解を述べる機会を与えたということである。一人の生徒の「同世代の人の意見を聞けて良かった」という感想を裏返せば、日頃の生徒同士の討論が成立しにくくなっていることを意味するだけでなく、生徒議会やH.R.での生徒同士の討論が成立しにくくなっていることを物語っており、自分の意見をはっきり表現でき、他人の意見をしっかりと聴くという民主主義を守るための基本的能力が危くなってきているといえる。このような生徒の現状をみるならばまだ不十分とはいえ生徒同士の討論の時間を必ず持ったこの授業形式は意義あるものである。
  - ② 教科目にとらわれずしたがって決まった教科書もなく、教師も生徒と共に考えるという形態は、まさに本来の学習の姿である。これは生徒に対して学習とはどういう事なのかを知らず知らず考えさせることになった。そしてさらに学校での授業とは本来どうあるべきなのかという事についても考えさせるキッカケを与えた。
  - ③ 短所としては、きちんとした知識の獲得が弱い、むしろ獲得された知識を使う場面が多く、予備知識の少ない生徒にとっては分りにくいしおもしろくない授業となった。また不熱心な生徒にとっては安易に流れそうになった。報告書なるべく書かせたが、それもパスしてしまう生徒が一人居た。これは普通形式の授業でもそういうことはあるが、この総合学習では、そういう生徒も乗ってくるのではないかと期待していたが、この生徒については期待はずれであった。
  - ④ 13人という少人数は少人数教育の一つの実践例となった。少人数でも、今の生徒はおかまいなくムダ話をするし、居眠りをするし、よそ事（内職）をする。本年度（1987年度）も12名で開講されているがやはり同じ傾向がある。教師側からみれば少人数の方が注意しやすい。ただそれだけである。討論形式がとれるのは少人数のお蔭である。少人数を十分生かす授業方法を創出しえないでいるというのが現状である。
- (3) 総合学習とは何であったか。

三学期の反省会での一部生徒の発言を先に引用し述べたように、学ぶとは、授業とはほんらいどんなものなのかに気付いていった。これがどの程度の深まりを持つかは将来の生活にかかっている。1987年1月26日

に行われた茶話会（授業の一環として行った）で、一人の男子生徒が、大学に入ったら絵をかいったり旅行をしたりしたいといった。どんな学習にしたい、どんな勉強をしたいと言わなかった。従って学ぶ意欲が高まったとまでは言い切れないし楽観は許されないが少くとも生活意欲はあるという事であろう。

この総合学習に集った13人は、遅刻や早退が多く、学校に来て授業に出ずに保健室に逃げ込んでいる時間の方が多い生徒達が少なからず含まれていた。茶話会で話された言葉を借りるなら、「高校を途中でやめたかった」「学校へ来るのがめんどろであった」「朝起きるのがいやだった」「朝の通学ラッシュがいやだった」「学校に来てもためにならないと思っていた」「学校がいやであった」等いわゆる不適応を起している生徒達であった。しかしいやいやながらがまんして三年間を過ごしてみれば、やはり学校に来ていて良かったと思い、いつまでも学校に居たいと思ひ、充実した生活を送って来たと思えてくるのである。これらの生徒と（週2時間とはいえ）一年間共に学んで感じた事は、入口が大事であるということ、即ち導入が大事であるということである。これらの生徒はがまん力が弱い、入門がうまくできないとあきらめてしまう傾向にある。導入に興味深いものにすると同時にがまんするよう励ましてやることも大事である。この総合学習は、一般の授業とやや異なり、討議の時間がある。試験はレポート形式が多い、少人数であり、いろいろな先生の話が聞けるということで、一種の興味や関心を引き起こし、教師も学んでいるということで励ましも受けたといえる。

たとえば二学期はとくに一人一人の発言の機会が増えた。そのことにより、はじめはうまくしゃべれなくとも、それをじっとがまんして聞いてやることによりだんだんうまくなり、反省会では、「皆んな上手にしゃべれるようになって来た」という発言が生まれるに至った。発言がうまくできるようになれば、以前より授業に主体的に参加できるようになり、ついに、授業はほんらい生徒達が立案していくものだといった趣旨の発想ができるようになる。

男子生徒の殆んどは授業中内職をしていた。とくに2学期後半から3学期は激しかった。これは入学試験の方に気をとられていたためで、それを振り切るだけの魅力がこの総合学習にはなかったといえる。

#### 【総合評価——生徒にとって——】

1. 勉強とは、授業とはどんなものをつかんだ生徒がいる。授業は自分達で作り、勉強のテーマも自分達で選ぶのが本来の姿だということ。
2. 「生命」に関して興味や関心が持てるようになった。今後このことに関して注目していくという。

3. 討議や意見発表の大切さを知った。日頃真面目な話をお互い同士していないことに気がついたようだ。この総合学習の討議によって同世代の人の物の考え方がわかったという。日頃の生徒達はいかに相互の話し合いが不足しているかがこれで分る。
4. 将来の職業を選ぶきっかけになった者がいる。その生徒は、医療の社会性を知ったという。
5. 一部の生徒にとっては、生き方を学ぶことになった。

#### 【総合評価——教師にとって——】

##### 授業内容が総合化されたか

やや達成されたが、自然科学方面が弱かった。とくに生徒は文系選択者ということで、テーマが「生命について」でありながら自然科学方面からのつっこみが不足した。さらに、生物学領域から提起される生命観に対して倫理領域ではどう考えるのかといった教師同士の討議が少なかった。

##### 授業方法の総合化

生徒の討論を授業にとり入れたり、生徒の自主的研究とその成果の発表という形式を多くとり入れたことは授業方法の多様化になったが、全く不十分であり、生徒からもその単調さは指摘された。(とくに1学期の授業について)

したがって授業方法の総合化は全くの不十分であったといえる。これは今後の課題である。

##### 学校教育全体の総合学習化について

校内的には、1985年12月に現代社会の増単分としての法的地位は認められた。しかし学校行事、修学旅行そして他の科目の授業を総合学習の観点から見直そうというような学校全体としての気運は全く弱い。総合学習研究グループにやらせておけば良いといった段階である。

高校三年間の卒論的まとめの作製を生徒に課したいと計画していたが全く不十分な結果しか得ておらず、大学入試という条件を克服できないでいる。したがって全校的に卒論問題を提起する裏付けを持ってないでいる。

#### (4) 今後の課題—1987年度にむけて—

##### 1. 大テーマ決定に生徒の意見をどうとり入れるか

1986年度の生徒からこのテーマ「生命について」は賛否両論を得ているが、賛成の方が多い。このテーマは教師にとっては、広くて良いものであり変える必要を認めていない。したがってこれを1つの案として生徒に提示し趣旨を説明し、意見を求める。

1987年度はすでに始まっている。われわれは、大テーマ決定にも生徒の希望をとり入れようという1986年度の生徒の意見に従って、大テーマ「生命について」を提示し趣旨を説明し、1986年度の一年間の様子を参考

のために知らせ、生徒の意向を聞いた。反対者は一人もいなかった。もし反対者が多ければ、他のテーマを生徒達に考えさせる予定でいた。

##### 2. 授業計画立案への生徒の参加

講義、自学自習、研究発表、卒論作りという1986年度のパターンについて知らせこれに対する意見を聴く。

現在(1987年5月)のところいわゆる小テーマについて希望をとり1学期分の授業計画を作った。

生徒の小テーマに対する希望内容を検討すると、生命の誕生、生命の死、生きる悩み、の三つに大別されるとの判断をわれわれは下した。その結果次のような授業計画を作った。

#### 総合学習1学期授業予定表(1987年度)

4/9	オリエンテーション(Ⅰ)	
	総合学習とは、昨年の例	
4/13	オリエンテーション(Ⅱ)	
	テーマについて(大テーマ、小テーマ)	
4/16	オリエンテーション(Ⅲ)	
	生徒の希望テーマの調査	
4/20(月)	生命の起源 徳井 田中	}
23(木)		
4/27(月)	生命の思想史 田中 徳井	}
5/7(木)		
11(月)	宗教と生命観 田中 徳井	}
14(木)		

#### 中間テスト

5/25(月)	討論(これまでのまとめ)	
5/28(木)	脳死と 三橋 田中 徳井(5/28)	}
6/1(月)		
4(木)	臓器移植 徳井 田中(6/1)	}
8(月)		
6/11(木)	遺伝子操作・三橋 田中 徳井(6/4)	}
6/15(月)		
6/18(木)	体外授精 徳井 田中(6/8)	}
22(月)		
6/25(木)	ベト君 ドク君 石川 徳井 田中	}
6/29(月)		
7/2(木)	異常出産 川合 田中 徳井	}
6/18(木)	うつ病 長谷川 田中 徳井(6/18)	}
22(月)		
6/25(木)	悩み、非行、自殺 田中 徳井	}
6/29(月)		
7/2(木)	死刑 高木 田中 徳井(6/29)	}
7/2(木)	について 田中 徳井(7/2)	}

#### 期末テスト

7/9(木)	1学期のまとめ	}
13(月)		
7/16(木)	2学期にむけて研究テーマの決定	}
	⑦ 障害者と社会 徳井 田中	

### 3. 小テーマの精選

これも1986年度からの課題である。前述の授業計画の如く1987年度は一つの小テーマにつき少なくとも2時間をかけることにする。立場の異なる教師の討論を入れる。とくに理系教師と文系教師のくみあわせで一つのテーマを多方面からみる。1986年度は15の小テーマがあったが、1987年度は10テーマに精選した。

### 4. 授業方法の多様化と少人数教育の効果的活用

前述の理系教師と文系教師の組み合わせにより教師同士のディスカッションも入れていく。生徒同士の討論が成立するよう司会の仕方をうまく工夫する。せめて、VTRを大いに活用する。将来は、見学、社会人講師による授業などを入れる。

### 5. 聞く、話す、書く、といった能力を高めるよう授業を工夫するよういつも心掛ける。

### 6. 評価方法の開発

新しい形態の授業にはそれに合った新しい評価方法が必要である。評価の中心課題は、テーマをどの程度深めたかを適確に評価することである。それには、たとえば、テーマに関連する新聞記事、雑誌記事、小説などに対する自分の考えを述べさせる。自分の考えを啓蒙宣伝するためのポスター、いろはがら、童話、マンガなどを書かせる。教師団との対話による評価、これは一種の口頭試問の導入である。したがってこれ

らはすべて、少人数教育の利点を生かした評価はどうあるべきかの研究ともいえる。

### 7. 学校全体への総合学習化へのはたらきかけ

このためにはわれわれ総合学習グループは、本校の置かれた立場を十分に考慮に入れて次のようなことを研究していかなければならない。

イ 学校での全ての営みを教育の観点からみなおす。

ロ 各教科のミニマムエッセンシャルを作る。この基準は、高校を完成教育とみなした時のレベルで良い。そして自教科の授業を総合学習の観点から見直してみる。受験学習以外にどんなやり方がありどんな目標があるのかを検討する。

さらにその上に立って中・高・一貫の教育課程案を作る。最後の高校三年の段階でどんな卒論的テーマが良いかを考える。その時今行っている「生命について」の下での小テーマは有効かどうかを検討する。

ハ 総合学習の観点から中等教育を見直すことにより中等教育全体の研究へと発展させていく。そのことは附属学校の在り方の研究ともなる。すなわち総合学習を研究する場としての附属学校であり、それは中等教育の在り方を研究する物としての附属学校でもある。これこそが附属学校本来の姿ではないだろうか。